

あとがき

不治の病魔におそわれた妻かずよの日々は、ぼくにとって尋常なものではなかった。が、よくよしてはおられなかった。最後の入院は浴室付きの個室を借りていた。

ぼくは朝、出勤の途中、新聞と郵便物などを持参して立ち寄り、かずよの様子を聞いて出社し、帰途は、缶ビールを一つ買って病室に立ち寄るのが日課となっていた。

浴室がつかえる時は、勤務中でも抜け出して、入浴させるように心がけていた。かずよは風呂が大好きで、赤ん坊のようによろこんでいた。時にはベッドに添え寝して、若い看護婦さんから「あらあら」とか「まあまあ」などと冷やかされることもあった。

そのころ、ぼくは新聞社内の西部厚生文化事業団事務局長という福祉関係のポストに就いていた。小所帯の職場で、スポーツや展覧会などを催す企画部と同室であった。意外と出張も多く、中国に行ったり、九重の朝日キャンプ場に行くことも多かった。そんな時は、毎日の

ように絵はがきを送って、かずよを励ましていた。かずよから目を離すことはできなかった。ぼくらにとつて三人目の娘まどかの結婚式が一九八八年四月におこなわれることになったが、もうかずよは出席できそうになかった。せめて家から送り出したいと願って、病院の許しを得てなんとか三時間だけ家に帰ることができた。花婿、花嫁が礼装でかずよに花束をプレゼントしてくれて、喜びをともにしたのがやっとだった。

ぼくも、東京本社での会議の連絡を受けて、かずよの状態がよければ行くつもりにして、病室に詰めていた。だが、その前日になって、病状はいちじるしく悪化した。心臓の動きをキャッチする器機の音が異常になっているように感じられた。もう出張どころではなかった。午前三時すぎだったと思う。機械音が止まった。

すべてが終った。うつろな思いで、その瞬間、なみだもこぼれなかった。

かずよは、病いと闘いの日々を短歌にして綴っている。それは『歌集 生かされて—— 外科病棟201号室より』として出版された。かずよの闘病の思いを知って頂くために、全文を収録した。

思えば、かずよと出会い、かずよと愛をわかちあい、かずよと共に生きて二十九年たって

いた。かずよは平吉にとつて過ぎたる妻であり、同志であった。

かずよはすぐれた資質をもった女性であった。その資質を存分に発揮する上で、ぼくはちよつぱりお手伝いができたのかなあと思ったりしていた。がんに侵されさえしなければもつともつと羽根を広げて宇宙に飛翔したことだろうと思われてならなかった。

二〇一三年夏

水上平吉